

博士論文(要約)

論文題目 近代日本における反西洋的言説の研究
 —「アジア・モンロー主義」と「東亜協同体」論を中心に—
氏 名 曾 寶 満

目 次

序章

第一節 本論文の問題意識

第二節 先行研究

第一項 アジア社会論

第二項 近代批判の思想と保田與重郎

第三節 本論文の課題と構成

第一部 「東亜協同体」論の前夜

第一章 一九二〇年代の「社会化」的論壇——田中王堂と杉森孝次郎の文明批評とアジア論を中心に——

はじめに

第一節 第一次大戦前後の評論界と文明批評家

第二節 第一次大戦直後の精神的観察

第一項 英米政治家への目差し

第二項 文明批評家の文明論と米国観——田中王堂・杉森孝次郎を中心に

第三節 一九二〇年代の評論の「社会化」

第一項 文芸・思想・文化評論における執筆層の多様化

第二項 総合評論における執筆層の変化

小括

第二章 一九三〇年代前半の国防思想普及運動——陸軍中堅層の擡頭と「アジア・モンロー主義」論——

はじめに

第一節 満州事変直前の軍官僚と政治宣伝運動

第一項 思想戦の構想

第二項 陸軍上層部の姿勢

第二節 陸軍による「容喙拒否」の論理

第一項 陸軍上層部と中堅層の米国外交への見方

第二項 満州事変期の政治宣伝

第三項 事変期における国民支持の調達

小括

第三章 一九三〇年代前半の地域主義的レトリックの討論——「アジア・モンロー主義」論を中心に——

はじめに

第一節 中野正剛・高木友三郎・杉森孝次郎の論点

第一項 中野正剛・高木友三郎の「アジア・モンロー主義」論

第二項 杉森孝次郎の地域主義論

第二節 横田喜三郎・清沢冽の反論

第一項 横田喜三郎の論理と視角

第二項 清沢冽の論理と視角

第三節 蠟山政道の批判——東亜協同体論に至る伏線

第一項 「アジア・モンロー主義」批判

第二項 アジアにおける諸民族と近代化への眼差し

小括

第二部 「東亜協同体」論・「東亜新秩序」の時代

第四章 保田與重郎の大陸体験——一九三八年五月日本占領下の北京訪問を手掛かりに——

はじめに

第一節 論壇への登場

第一項 保田の経歴

第二項 保田と一九三〇年代後半の論壇

第二節 朝鮮半島・中国大陸旅行（一九三八年五～六月）

第一項 旅行について

第二項 日中親善論への批判

小括

第五章 保田與重郎の東アジア認識——東亜協同体論と民族問題への眼差しを手掛かりに——

はじめに

第一節 東亜協同体論者の中国ナショナリズムへの眼差し

第一項 排斥・是正論——奥村喜和男と蠟山政道

第二項 利用論、肯定論——毛里英於菟と三木清

第二節 保田與重郎の日中戦争観

第三節 保田與重郎の一九四〇年代前半の言説

小括

終章

第一節 要約と結論

第二節 アジアの捉え方と今後の研究への展望

註編

◎ 図表一覧

表一、保田與重郎単行本一覧（一九三六～一九四三年）

表二、保田與重郎、竹内好略年譜（戦前）

表三、陸軍省調査班の仕事とその人事（一九二八～一九三二年）

表四、満州事変直後の陸軍省パンフレットと輿論喚起関係資料（一九三一年九月～一九三二年一月まで）

本 文

5年以内に出版予定ですので、全文の公開は控えさせていただきます。

参考文献一覧

1、未刊行史料

東京大学近代日本法政史料センター原資料部所蔵の荒木貞夫旧蔵文書及小冊子
大妻女子大学図書館所蔵の肥下恒夫宛保田與重郎書簡、中河与一宛保田與重郎書簡
陸軍省作成、満洲関係小冊子集（アジア歴史資料センター：Ref. C14030555900）
陸軍省作成、時局関係資料綴（アジア歴史資料センター：Ref. C15120135500）

2、既刊史料

相模女子大学所蔵同人雑誌『イロニアー』第一〇号～第一二号（新学社、一九九五年～一九九六年）
東京書籍商組合編『出版年鑑』（昭和初期の部分）
『東洋時論』全八巻（龍溪書舎、一九九五年）
文藝家協會編『文芸年鑑』（文泉堂出版、一九七九年）
今井均『今井均回顧録』（芙蓉書房、一九八〇年）
角田順校訂『宇垣一成日記 1』（みすず書房、一九六八年）
小林龍夫ら編『現代史資料 7 満洲事変』（みすず書房、一九六四年）
藤原彰・功刀俊洋編『資料 現代史資料 8』（大月書店、一九八三年）
文献資料刊行会編『復刻 政友 6』（柏書房、一九八一年）
『コギト』復刻版（臨川書店、一九八四年）
伊藤隆編集『松本学日記』（山川出版社、一九九五年）

3、論著

三谷太一郎『近代日本の戦争と政治』（岩波書店、一九九七年）
酒井哲哉『近代日本の国際秩序論』（岩波書店、二〇〇七年）
武者小路公秀・蠟山道雄編『国際学—理論と展望』（東京大学出版会、一九七六年）
平野健一郎『国際文化論』（東京大学出版会、二〇〇〇年）
平野健一郎等編『国際文化関係史研究』（東京大学出版会、二〇一三年）
石井知章・小林英夫・米谷匡史編『一九三〇年代のアジア社会論：「東亜協同体」論を中心とする言説空間の諸相』（社会評論社、二〇一〇年）
松本三之介「「東亜協同体」論をめぐって」『近代日本の中国認識：徳川期儒学から東亜協同体論まで』（以文社、二〇一一年）

- 西川長夫『国境の越え方——国民国家論序説』（平凡社、二〇〇一年）
- 近代日本研究会編『年報 近代日本研究 五 昭和期の社会運動』（山川出版社、一九八三年）
- 近代日本研究会編『年報 近代日本研究 一 昭和期の軍部』（山川出版社、一九七九年）
- 福田恆存編集『反近代の思想』〈現代日本思想大系 32〉、筑摩書房、一九六五年）
- 子安宣邦『「近代の超克」とは何か』（青土社、二〇〇八年）
- 竹山護夫「日本ファシズムの文化史的背景」（同『近代日本の文化とファシズム』〈竹山護夫著作集第五巻〉、名著刊行会、二〇〇九年）
- 清家基良『戦前昭和ナショナリズムの諸問題』（錦正社、一九九五年）
- 大河内一男編『社会主義』〈現代日本思想大系 一五〉（筑摩書房、一九六三年）
- 飯田泰三「ナショナル・デモクラットと「社会の発見」」（同『批判精神の航跡——近代日本精神史の一稜線』、筑摩書房、一九九七年）
- 有馬学『「国際化」の中の帝国日本——一九〇五～一九二四』（中央公論新社、一九九九年）
- 大澤聡『批評メディア論：戦前期日本の論壇と文壇』（岩波書店、二〇一五年）
- 千葉功『旧外交の形成——日本外交一九〇〇～一九一九』（勁草書房、二〇〇八年）
- 知的協力会議編、河上徹太郎等著『近代の超克』（創元社、一九四三年）
- 内田義彦・大塚久雄・松島栄一編『マルキシズムⅠ』〈現代日本思想大系〉二〇（筑摩書房、一九六六年）
- 江口圭一『十五年戦争研究史論』（校倉書房、二〇〇一年）
- L・ヤング(加藤陽子他訳)『総動員帝国——満洲と戦時帝国主義の文化』（岩波書店、二〇〇一年）
- 酒井哲哉『大正デモクラシー体制の崩壊 内政と外交』（東京大学出版会、一九九二年）
- 山室信一『思想課題としてのアジア——基軸・連鎖・投企』（岩波書店、二〇〇一年）、嵯峨隆『アジア主義と近代日中の思想的交錯』（慶應義塾大学出版会、二〇一六年）
- 井上寿一『アジア主義を問いなおす』（筑摩書房、二〇〇六年）
- 佐藤卓己『言論統制 情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』（中央公論新社、二〇〇四年）
- 加藤陽子『戦争の日本近現代史』（講談社、二〇〇二年）

西崎文子『米国外交とは何か』（岩波書店、二〇〇四年）
菅英輝編著『アメリカの戦争と世界秩序』法政大学出版会、二〇〇八年）
竹内好等編『近代日本思想史講座 7 近代化と伝統』（筑摩書房、一九五九年）
ケヴィン・M・ドーク『日本浪漫派とナショナリズム』（柏書房、一九九九年）
渡辺和靖『保田與重郎研究——一九三〇年代思想史の構想』（ぺりかん社、二〇〇四年）
戸部良一『日本陸軍と中国——「支那通」にみる夢と蹉跌』（講談社選書メチエ、一九九九年）
高宮太平『軍国太平記』（中央公論新社、二〇一〇年、初出：酣灯社、一九五一年）
『保田与重郎全集』全四〇巻・別巻五巻（講談社、一九八五年十一月～一九八九年九月）
神戸実業組合联合会編、佐々弘雄述『東亜新秩序論』（神戸実業組合联合会、一九三九年）
蠟山政道『東亜と世界——新秩序への論策』（改造社、一九四一年）

4、新聞雑誌

『読売新聞』
『東京日々新聞』
『東京朝日新聞』
『時事新報』
『毎日新聞』
『国民新聞』
『太陽』
『中央公論』
『改造』
『実業之世界』
『新潮』
『文藝春秋』
『国家学会雑誌』
『国際法外交雑誌』
『帝国大学新聞』
『国際知識』

5、英文文献

Hobden, Stephen and Hobson, John M. eds. *Historical Sociology of International Relations*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.

Armitage, David. *Foundations of Modern International Thought*. Cambridge : Cambridge University Press, 2013.

Bull, Hedley. *The Anarchical Society : A Study of Order in World Politics*. London : Macmillan, 1977.

Bull, Hedley and Watson, Adam eds. *The Expansion of International Society*. Oxford: University Press, 1984.

Morgenthau, Hans Joachim. *Politics among Nations : The Struggle for Power and Peace*. New York : McGraw-Hill, 1985.

Aydin, Cemil. *The Politics of anti-Westernism in Asia : Visions of World Order in Pan-Islamic and Pan-Asian Thought*. New York : Columbia University Press, 2007.

Pyle, Kenneth B.. *Japan Rising : The Resurgence of Japanese Power and Purpose*. New York : PublicAffairs, 2007.

Mayall, James. *Nationalism and International Society*. New York: Cambridge University Press, 1990.

論文の内容の要旨

論文題目 近代日本における反西洋的言説の研究

——「アジア・モンロー主義」と「東亜協同体」論を中心に——

氏 名 曾 寶 満

本論文は、一九三〇年代の日本の地域主義（国際的なリージョナリズム）論と中国ナショナリズムとの相剋に焦点を当て、第一次世界大戦前後から昭和戦前期にかけて、日本の知識人の近代文明批判と地域主義論的な表現の変遷との関係を考察したものである。

序章では、戦前の地域主義論とナショナリズムとの関係及び東亜協同体論者の文明史的理解に着眼して、アジア社会論と近代批判の思想について、従来の研究視角と知見を整理した。そのうえで、第一次世界大戦以降の日本知識人の文明（批評・史的認識）論とナショナリズムへの態度を整合的に検討することが、一九二〇年代と一九三〇年代の地域主義論の思想的様相を考察する際の一つ有効な補助線になることを指摘した。

第一部は、第一次世界大戦前後から日中戦争以前の評論界における、近代文明批判と地域主義的なレトリックとが相互に絡み合った過程について検討した。

第一章「一九二〇年代の「社会化」的論壇——田中王堂と杉森孝次郎の文明批評とアジア論を中心に——」では、第一次大戦後に論壇で活躍し始めた文明批評家の田中王堂、杉森孝次郎が、大戦後の英米政治家が唱えた国際的な正義に違和感を示した理由を探った。それと同時に、王堂と杉森らの文明論、およびそこに立脚した中国ナショナリズムへの眼差しとアジアの捉え方をも考察した。第一次世界大戦前後から一九二三年にかけての日本は、多くの知識人が国際連盟の実現を通じた、英米デモクラシーの理想への期待を高めたが、他方で安易なデモクラシーの謳歌を警戒し、米国の軍国化・大資本国家への変貌に注意を呼びかけた学者や政界人も少なくなかった。国際協調主義が支配的であったと思われがちな一九二〇年代の評論界は、対米強硬論に対して謹慎と自重を求める知識人の呼びかけが持続的に存在したにもかかわらず、英米の資本主義的／侵略主義的攻勢に対抗しなければならないと主張し、東アジアにおけるナショナリズムの隆盛の次の段階として地域統合の可能性に注目する傾向が顕著になってきていた。

しかし、大正デモクラシー期の文明批評を最も代表する者とも言える王堂と杉森は、英米の勢力拡張への警戒を共有しながらも、アングロサクソンへの強い対抗意識からくるような、人

種戦争を引き起こす恐れのある、政治的意味合いの強い汎亜連盟のような提案ないし言説からは、明確に距離を置いていた。王堂と杉森の文明論における個人主義と自由意志への尊重の姿勢は、彼らの国際関係評論にも強く反映することになったことを解明した。

第二章「一九三〇年代前半の国防思想普及運動——陸軍中堅層の擡頭と「アジア・モンロー主義」論——」では、満州事変前後の政治宣伝における陸軍上層部と陸軍省調査班ら中堅層の動向、及び軍部の政治宣伝において地域主義的な概念が多用された現象について考察した。従来の研究では、軍部の公的見解を代弁する陸軍パンフレットについて分析はなされてきたものの、その作成元である調査班自体については十分に検討されてこなかった。そこで、第一節では、陸軍省調査班に所属する中堅将校のイデオロギー性と、その思想や国防構想を明らかにした上で、彼らに対する軍上層部の支持的姿勢と、国防思想普及運動の変容を考察することで、事変期に半官製団体やメディア側と軍を繋ぐパイプ役として活動した中堅層が、軍部の行動に対する国民の支持調達に成功した諸要因を探った。また、事変期の陸軍省調査班の仕事の内容とそこに所属する将校のリストを附表に整理した。第二節では、事変期の政治宣伝において利用されたステレオタイプの一つである「独善的な米国外交」像が実は一九二〇年代初頭から既に、一部の陸軍中堅層とジャーナリストの間にしみ込むように形成されていたことを解明した。こうした考察を踏まえ、更に日本の大陸政策と米国のカリブ海政策の類似性を認識した中堅幕僚らの「アジア・モンロー主義」的主張が、事変後の帝国の公的な論述に反映された過程を明らかにした。

第三章「一九三〇年代前半の地域主義的レトリックの討論——「アジア・モンロー主義」論を中心に——」では、満州事変期に流行った「アジア・モンロー主義」のような地域主義的レトリックをめぐる、国際法学者と政治学者の批判に現れた地域主義への態度について分析を試みた。国際法学者の横田喜三郎とジャーナリストの清沢冽は共に、先進国の干渉によって政治的・経済的に圧迫された地域の反抗の実例に着目し、そこに現れた独立への自由意志を尊重する姿勢から、事変期の論壇に物議を醸した「アジア・モンロー主義」のような主張を非難している。しかし一方で、満州事変勃発後、東アジア事情に疎い国際連盟が東アジアの国際問題の解決を主導することに違和感を示した知識人も少なくない。政治学者の蠟山政道は、「アジア・モンロー主義」の主張における非理性的な論述とその論理の不明確さを指摘しながら、アジアにおける民族的反抗の問題は文明発展の段階の相違によるところが大きいと考えており、中国社会の近代国家としての政治力に懐疑的であった。日中戦争勃発後、蠟山は、日本の大陸進出がアジア地域の経営と開発といった共同の福祉を促進することに繋がるという理解のもとに、崩壊するであろう西欧文明のアンチテーゼとしての「東亜文化」と、それを創出する政

治主体の問題を捉えようとしている。

事変期の「アジア・モンロー主義」というレトリックをめぐる議論は、用語それ自体を論証するものというよりも、世界観と思考様式の対立の深刻さを体現したものであり、論者それぞれの文明史的認識と近代化への態度がその言説に大きく影響している。「アジア・モンロー主義」論を取り扱う際には、論者によって、その表現と認識との間に乖離がある可能性に注意すべきであることを指摘した。

第二部では、戦時下を代表する評論家の保田與重郎の大陸旅行及び保田の東アジアの捉え方と文明論に着目して、革新官僚・東亜協同体論者と保田の中国ナショナリズムへの眼差しについてそれぞれ比較検討することで、各自の特徴を析出した。

第四章「保田與重郎の大陸体験——一九三八年五月日本占領下の北京訪問を手掛かりに——」では、戦時下を代表する批評家の保田與重郎が論壇に登場した歴史的背景、及び保田の友人竹内好が案内した、一九三八年五月の北京訪問を中心に検討した。一九三〇年代半ば、保田がリードした日本浪漫派というグループは、マルクス主義文学退潮後の文学的空白を埋めた。治安維持法と特別高等警察による社会主義的思想の弾圧が激しさを増した昭和初期、保田は、自らの国学の素養とドイツのロマン主義を基に、独自の古典論と近代主義批判を展開していた。ことに、盧溝橋事件以降、混乱した政治状況下で推進された政府の日中親善政策に対して、知名な評論家として発言権を持ち得た保田が、間接、直接に当局の施策を批判したことを考察した。

第五章「保田與重郎の東アジア認識——東亜協同体論と民族問題への眼差しを手掛かりに——」では、日中戦争直後の保田與重郎の対中認識及び地域主義への態度を検討した。その際、同時期の革新官僚と東亜協同体論者に見られた、様々な中国ナショナリズムへの態度を尺度としつつ、戦時下の言説空間における保田の位置を指摘した。中国旅行において、保田は、占領区統治の実際と中国の知識人に触れる機会を得た。「民族的なもの」への回帰を追求する信念から、保田は近代化過程におけるナショナリズムの発展に独特な見解を有していた。北京で聞いた知的混乱から、東亜協同体論者の追求した日本帝国主義の自己修正に同感しないばかりか、日本軍占領区で行われた日中提携や日中親善を目指す文化工作に違和感を示していたことを指摘した。

東亜協同体論者達の多くにとって、西洋列強に対してアジア地域統合を立ち上げることが、ナショナリズム隆盛の次にくるべき必然的な段階であり、アジア諸地域の唯一の生存方法だと考えられていた。しかしながら保田は、戦時下の政治的地域統合に対して、各地域に受け継がられる歴史および歴史的、文化的な共感の重要性を主張し、地域主義論の弱みを突き止めようとしていた。反西洋ないし反近代の文脈から見れば、一九三〇年代の日本は「西欧の没落」と

か「近代の超克」というような言葉が甚だ素朴に受けとられはじめた時代であった。しかし、保田は、近代文明批判の態度を取りながらも、民族自決やナショナリズムに抑圧するような地域主義論に対して批判的であった。第二部では、保田が日中戦争後に流行した地域主義の流れに異議を唱え、歯止めをかけようとした存在であったことを明らかにした。

終章では、上記の考察を整理した上で、昭和初期における近代文明批判の思想と地域主義論的な表現の関係について保田を中心に論じた。文明批判の思想的系譜に属する保田は、国家の日中文化親善政策の欺瞞を批判しながらも、戦時下の大陸侵攻を日本民族の「偉大な遠征」と表現し、戦争肯定の言説になるに至った。戦前期、ことに日中戦争勃発から日米戦争以前の知識人の地域主義をめぐる思想的様相を考える際には、彼らの近代化とアジアの民族問題への眼差しを総合的に検討する必要があるとともに、彼らの言説に現れる表現と、その表現の水面下に流れる認識との落差にこそ注意すべきだと指摘した。